シリーズ 元気です！ ⑱

海を越えた和紙人形

―駒鳥会―

和紙人形との出合い

「自分の子どものように愛情を込めて作り上げています」と穏やかな目を細め語るのは、因州和紙を使って紙人形を制作しているグループ「駒鳥会」主宰の山本千恵子さん（北園2丁目）。

山本さんは、京都の人形教室で師範資格を取得した後、鳥取で文化教室の講師などを務め、駒鳥会を結成。現在の会員数は、八十人を超える。

和紙人形を制作中の会員のみなさん

山本さんが和紙人形のとりこになったきっかけは、たまたま友人に誘われて行った展示会で、石垣駒子さん（和紙人形作家／長崎市出身）が作った「駒子の紙人形」に出合い感動したからだ。

その人形は今まで見ていた平面的な紙人形とは違い、人形が立体的に作られていた。

心を込めて

昨年の国民文化祭に出品した「鳥取の子供の四季」は、しゃんしゃん祭り、ひな流し、貝殻節などの鳥取ならではの情景を五三八体の和紙人形で織り成した壮大なものだった。作品の完成には、会員たちが一丸となって半年もかかった。

「この作品ができたのは、会員や生徒のみなさんが手伝ってくれたから。みなさんの力がなかったらこんな立派なものはできなかった」と山本さんは、会員たちと苦労しながら作ったときのことを思い出し、満面の笑みを浮かべた。

山本千恵子さん

山本さんたちが作った人形は、今にも動き出しそうで、不思議と人形の顔に表情が浮かんでくる。

山本さんや会員は、資料を基に当時の人が着ていた着物やその場面の情景に気を配り、人形を一体一体心を込めて丁寧に作っている。

人形ひとつを作りあげるのに約四時間もかかるとか…。手間ひまかけてできあがった人形を手にしたときの喜びや感動が忘れられないという。

「枕元に置いて一緒に寝てやりたい。まるで、自分の分身のようで…」と会員の一人は話す。

広がる和紙人形の魅力

今年五月、姉妹都市のドイツハーナウ市に出かけ「鳥取の子供の四季」を寄贈。作品を発表した瞬間に「ワー！」という歓声と拍手が湧きあがった。

「その時、言葉がわからなくても心で通じ合える何かを感じました」と山本さん。

十月には、韓国清州市で開かれる「工芸ビエンナーレ」に、しゃんしゃん傘踊りの風景を再現した作品を披露する。

海を越えて、世界の人々の心をとりこにする和紙人形。駒鳥会の人形づくりは、これからも国際交流の輪を広げて行く。

ハーナウ市に寄贈した作品「鳥取の子供の四季」